

第3章 本学学生の現状と置かれている環境

3.1 各種調査から

本章では、学内で行われている諸調査の結果から工学院大学の学生の実情をさぐることにする。ここで取り上げる調査は学生部（現学生支援部）が2011年に行った「新入生入学時アンケート」と「2年生・3年生前期アンケート」と、生協がやはり2011年10月に行った「学生生活実態調査」である。学生部の行った調査はキューポート上で行われたもので全学生を対象としておりほぼ85%の学生が回答した。生協調査は7人に一人の抽出調査であり回答率は30%あまりであるが、学生部の調査とほぼ同じ結果を出しており、回答数は少ないもののおおむね信頼できる。

1) 工学院大学への入学について

まず注目すべきは、学生部調査で、新入生は本学を第1志望とするものが66.0%に上っていることである。教職員が漠然と考えている以上に、学生たちは本学に入学しようとして入学したということがはっきり示されている。入学してよかったかとの問いによかった、まあよかったあわせて65.8%であり、約3分の2の学生はよかったとしている。2,3年生になると入学してよかった、まあよかったがあわせて40.4%となっている。2,3年生の場合、他の項目では新入生と大きな差はないが、未回答が16.5%あるのが気になるところである。

表1 入学してよかったか（学生部調査） 2011年

	新入生	2, 3年生
良かった	31.0%	12.7%
まあまあ良い	34.8	27.7
普通	25.5	28.6
あまり良くない	6.5	9.6
悪い	2.2	4.9
未回答		16.5

大学生活への不安は、新入生、2,3年生とも「授業についていけるか」がそれぞれ78.4%、60.1%である。新入生の「友人関係」の不安は2,3年生になると半減しており大学生活へなじんでいることが分かる。

学生部調査では、「大学での目標」を聞いている。これについては生協調査では「工学院大学を選んだ理由」となっているが、男女別に集計があるのでそれを見よう。学びたい専門分野は54.6%でトップだが特に女子は76.9%にのぼる。次いで学力にあって28.1%、就職に有利が18.1%とつづく。大学生活での重点は、勉強第1とするもの25.3%だが女子では34.6%を占める。趣味第1は18.9%、豊かな人間関係が12.4%であるが、ほどほどとするものが22.5%にのぼる。女子の場合、勉強第一が34.6

%であり、趣味第一は9.6%と男子と比べて大きな差がある。

学年が上がるにつれて勉強第一とするものが増えている。これらからは本学の学生は専門の学修をすることを意識して入学して入学するが、すぐには勉学に集中して取り組むまでには到らず、就活や卒研が始まる中で勉強に取り組む様子がうかがわれる。

2) 大学生活

本節は主に生協調査からみる。登校日数は1週間あたり平均で5.1日、5日及び6日登校するものが75%をこえる。1年ではほぼ全員が6日ないし5日であるが、4年生になると5日が30%をこえるほか3日から6日に分散し、平均では4.2日となっている。

また大学生活の充実度について、本学が好きとするもの、学生生活が充実しているとするものがともに4分の3を超えている。充実度は自宅生が80.5%であるのに対して自宅外生は60.7%と差が開いている。これは家族関係が関係しているのだろうか。女子の方が充実しているものが10ポイント程度高い。

本学が好きというもので大学生活が充実していると答えたものが87.7%をしめるが、反面、あまり好きではない・嫌いとするもので大学生活が充実していないと答えたものは60.8%になる。大学の好き嫌いとは充実度は密接に関係していることがわかる。

本学の授業については、おもしろい授業がある、幅広い知識が得られる、専門的な知識が得られるについて7割から8割が満足しているが、少人数・ゼミ形式の授業があるに関しては思わないとするものが54.6%いる。項目による違いはあるがおおむね男子の方が厳しい評価をしている。

施設設備について多くの項目で満足していると見られるが、サークル活動の場・広場、スポーツ施設については半数を超えるものが不満としている。また異性との出会いや交友関係については67.8%が不満を示している。

サークル加入率は、自宅生が36.0%であるのに対して自宅外生は46.4%（平均39.4%）で、10%余りの差がある。男子36.5%、女子50.0%、学年の進行につれて加入率が低下し3,4年生の加入率はほぼ4分の1にとどまる。今後とも加入しないというものが36.9%もいる。

悩み事については、全体の平均で授業・勉学では61.4%、就職では53.0%、生活費やお金のことで49.4%である。授業、就職では東京理系平均より10%以上多い。3年生が悩みのピークであるが、4年生ではやや少なくなる。

就職予定者の割合は67.9%であり東京理系と比べて24.5ポイントも高い。これは大学院進学希望者が少ないことを意味している。全国平均26.6%に対して本学はちょうど半数の13.3%にとどまる。

相談相手は、平均で友人が34.5%、両親が16.5%で、それ以外は少ない。しかし4年生では友人が25.0%となり恋人が17.3%となって両親の13.5%をこえる。相談相手のいるものの割合は、全国理系平均より10%近く低い。相談相手がいないものが30.5%（男子35%、女子13.5%）で全国平均の18.7%を大きくこえる。しかし相談相手がほしいとする者は4.4%にとどまる。

なお学生相談室のデータによれば、2012年度の相談件数は延べ数で合計1790件で

ある。進路修学に関するものが 459 件、心理性格に関するものが 452 件、心身健康が 251 件、対人関係が 218 件となっている。相談室の報告からは、学内各部署との連携を進める必要があることと、教員や研究室での人間関係、特に教員の対応の問題が指摘されている。相談総数は学生数に対して 20%をこえるが、ひとりの学生が数回相談に来ることを考えると実数はかなり少なくなろう。ひとりの学生が 3 回相談に行っているとすると、約 1 割の学生が利用していることになるが、この割合について留意する必要がある。

3) 生活の態様

学生の住居別は、生協調査では自宅生は 75.9%であるのに対して自宅外生は 24.1%である。ほぼ 3 対 1 である。学生部調査では、新入生は 73.3%でほぼ同じだが、2、3 年生は 55.7%と少なくなっている。

生協調査によれば通学時間は自宅生と自宅外生では次表のように著しく異なる。

表 2 通学時間（片道）（生協調査）

	自宅生	自宅外生
新宿キャンパス	76.8 分	50.4 分
八王子キャンパス	97.6 分	27.4 分

通学時間の内訳として自宅生（全体）では、60 分～75 分が 24.9%を占め最多であるが、60 分未満 17.5%に対して、90 分～120 分が 22.7%、120 分以上が 25.4%である。中には 180 分以上とする者が 1.1%いる。これに対して自宅外生（全体）は 30 分未満が 46.5%である。75 分以上は 7.2%と少ない。おおむね八王子に通学する 1、2 年生は大学に近く居住するが、3、4 年生が新宿に通学するようになっていてもアパート等をあまり変えていないようである。

4) 学費・生活費

通常の 1 ヶ月の生活費は生協で調査している。これによれば収入は仕送り・小遣い、奨学金、アルバイト全部を含み、支出は食事、住居費、交通費などを含むものは次の通りである。参考までに東京（1 都 3 県）地区 23 生協のデータも掲げた。

表 3 1 ヶ月の生活費（生協調査）

	本学自宅生	東京自宅生	本学自宅外生	東京自宅外生
収 入	54,650 円	57,340 円	109,820 円	131,530 円
支 出	53,580 円	55,890 円	111,380 円	127,770 円

収入は、自宅外生は自宅生と比べて当然多いが、仕送り 69,490 円、奨学金 21,810 円、アルバイト 17,230 円であるのに対して、自宅生は小遣い 13,780 円、奨学金 14,840 円、アルバイト 24,240 円である。

収入の差は仕送り（小遣い）の差であるが、自宅生は奨学金が少なく、その分アルバイトを多く行っている。通学時間を考えると自宅生の方が時間的経済的に余裕はな

いといえる。

支出のうち住居費と食費を除くと自宅外生は 37,920 円であり、自宅生は同じく 44,520 円である。さらに交通費を除くと 33,250 円と 33,930 円となりほとんど差がない。しかし貯金・繰り越しは自宅生が 15,760 円、自宅外生が 7,550 円であり、実支出は自宅生が 8000 円ほど少ない。この中で勉学費、書籍費、教養娯楽費、電話代、日常費などを支出している。本学の自宅生、自宅外生はともに東京平均よりも少ないことに注意したい。

また生協調査では大学納付金の負担者を聞いている。自宅生、自宅外生とも親とするものは 85～87% で大差はないが、男子が 87.3% であるのに対して女子は 80.8% である。自分が負担しているものは 5.2% (男子 4.6%、女子 7.7%) であるが、特に自宅生は 6.3% になり、全国平均の 4.0% と比べて著しく高い。これに対して自宅外生は 1.8% にとどまっている。負担の割合は平均 65.9% (男子 79.4%、女子 30.0%)、100% 負担しているものは男子のみであるが 2% いる。学年の上昇に応じて自分が負担する者の割合が高くなるが、4 年生では 9.6% にもなり、負担の割合も 93.3% となっている。

学生部調査では、アルバイトをしているものは 51.5% にのぼる。していないと答えたものは 35.3%、未回答が 13.2% ある。生協調査では、現在アルバイトをしているものは自宅生 50.3%、自宅外生 32.1% であり、男女では女子の方が 5 ポイント余り高い。平均 45.8% である。アルバイトの日数は、学生部調査で 2、3 年生では 1 日が 9.4%、2 日が 25.1%、3 日 29.3% 4 日以上 21.0% であり、未回答が 15.2% いる。生協調査でアルバイトをしているものの日数は平均で自宅生 2.6 日、自宅外生 2.9 日であり、男子は 2.6 日、女子は 2.9 日で、女子の方がやや多い。これは大学納付金を負担しているものの割合が女子の方に多いことと関係があろう。1 日の時間数はいずれも平均 5 時間強である。

学生部調査では 2、3 年生に対してアルバイトについて聞いている。アルバイトは授業に支障があるかの問いについて、全く支障がないとするものは 33.1% であるのに対して、多少支障があるが 48.3%、かなり支障があるが 7.4%、あわせて 55.7% になる。収入の主な使途は趣味・交際費が 66.0%、生活費が 48.7% のほか、貯金が 45.6% に上がることが注目される。学費に充てる者が 20.9%、携帯電話料金は 20.7% となっている。ただしそれぞれの金額は聞いていない。これらを見てもアルバイトなしでは大学生活が行えない状況が分かる。

5) まとめ

以上見たところから本学の学生はおおむね本学での学修や学生生活に満足しているといえるが、大学の好き嫌いとおおむね充実度が関係している点は注目すべきであろう。本学が好きになることによって大学生活が充実しているといえるようになる。またその逆も言えよう。したがってさまざまな機会に大学生活に積極的に関わる経験を増やす取り組みを推進する必要がある。

しかしサークルに加入しているものが約 3 分の 1 であり、悩み事の相談相手がいない上にほしいと思わないものが 26% 余りいることに留意すべきだろう。

これを自立の高さと見るか、互いに孤立しているとみるか、十分な検討が必要であるが、他と関わりを持つ経験が少ないとも考えられる。クラブの参加を促進するためには施設の一層の充実が必要であろう。

より深刻なことは経済的条件とともに本学の学生の時間のなさ、通学時間やアルバイトの時間の長さである。特に自宅生は長時間通学をしているほかアルバイトの時間も長く、サークルへの加入率も低い。経済的支援として奨学金制度の活用があるが、学生寮が整備されれば通学時間を勉学に振り向けることが可能となる。

就職や勉学、人間関係等についての悩みも多く、引き続きこれらについて大学としての支援を進めることが必要である。本学の学生が自分の勉学やしてきたことを、自信を持って他にアピールできるようになればこうした悩みもかなり軽減できるのではないだろうか。自分に自信を持つことができるような経験をする勉学やサークルなどの場が充実することが大切であろう。特に少人数のゼミを1年生から3年生の間にも経験できるならば大きな力になるだろう。

(藏原委員)

3.2 「学生の元気」に関する学内アンケートから分かったこと

本学の「学生の元気」について、現状を把握するため、本学の各部・機関代表者および教職員を対象にアンケートを行った。その結果を以下にまとめる。アンケートの設問や記述回答の詳細は巻末の付録を参照されたい。

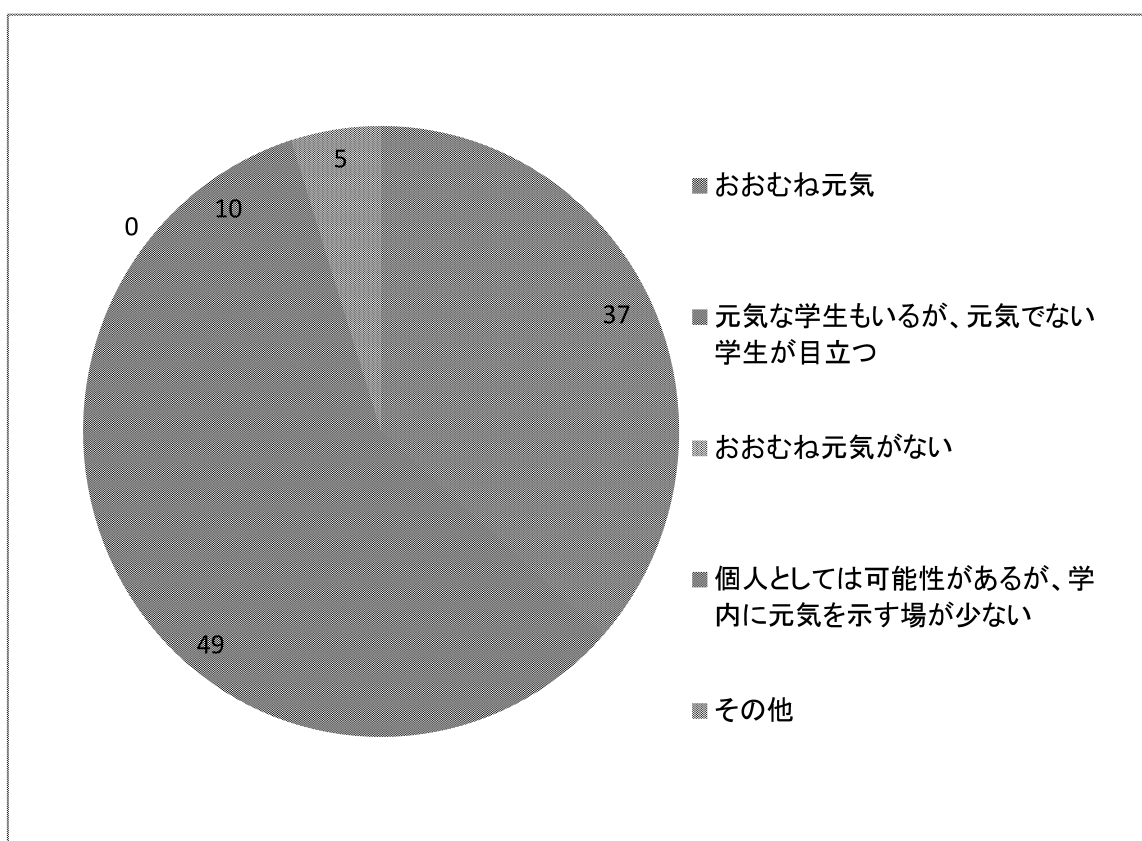


図 1. 「学生は元気であるか」に対する回答

まず、「学生は元気であるか」という教職員への設問に対する回答を図 1 に示す。「おおむね元気」であるという回答が 37%、「元気な学生もいるが、元気でない学生が目立つ」という回答が 49%であった。学生は総じておおむね元気であるが、元気のある学生と元気のない学生との差が大きく、元気のない学生が目立っていると考えられる。勉学、卒論、ボランティア活動、課外活動などに自主的・積極的に参加し取り組んでいる学生は十分元気であると思われる。特にボランティア活動は様々なものが充実しており、意欲的な学生は複数参加しているようである。その一方で、元気のなさが目立つのは友人も少なく、自宅と大学を往復しているだけの学生のようなものである。アンケートの記述回答から、元気のなさの要因としては以下があげられる。

・友人関係・コミュニケーション：なじみず一人でのいる学生。

- ・通学時間：八王子までの通学時間が長い。日々の往復が負担になっているケースもある。
- ・学内施設：特に新宿キャンパスに講義の空き時間を自由に過ごせる場所が少なく、B1Fの雰囲気も薄暗く落ち着かない。
- ・アルバイト：夜遅くまでアルバイトをしており学業に専念できていない。結果、成績も上がらず講義についていけないという悪循環に陥っている。

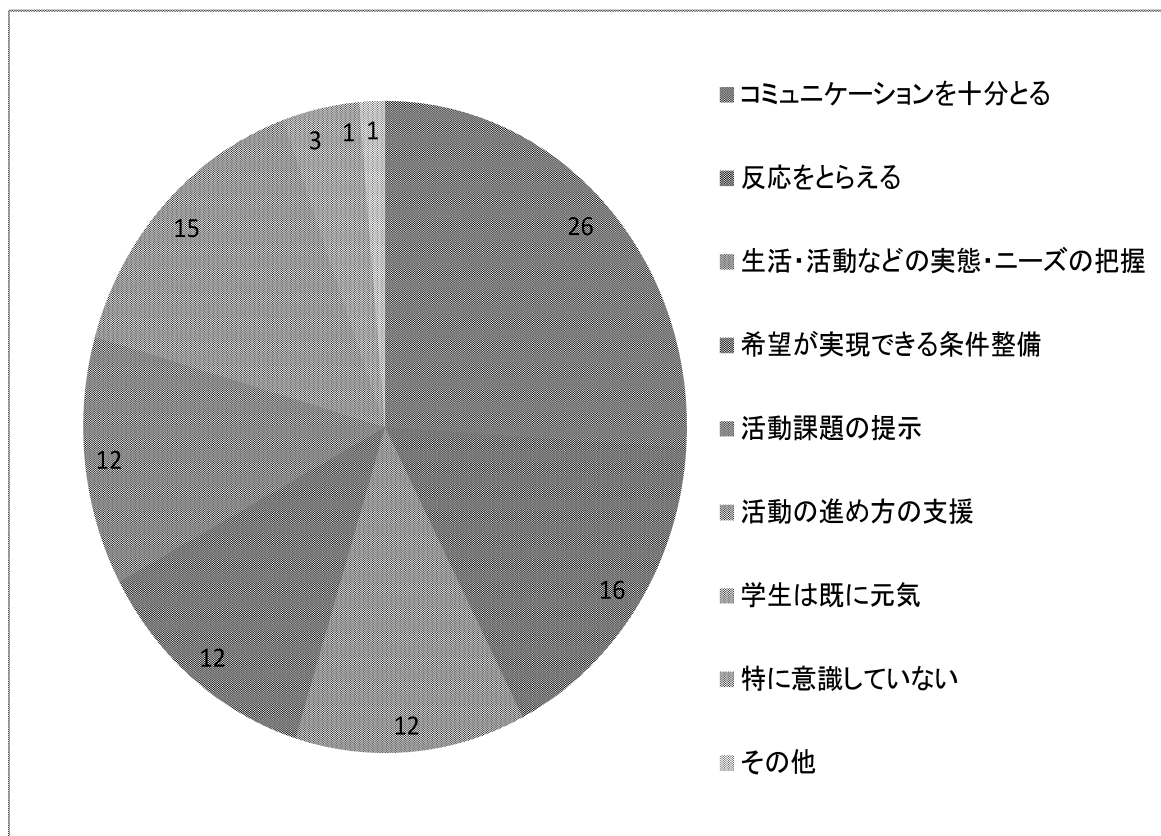


図 2. 「学生の元気を高めるために留意していることは何か」に対する回答

次に「学生の元気を高めるために留意していることは何か」という各部・機関代表者への質問に対する回答を図 2 に示す。最も意見が多かったのは、「学生とのコミュニケーションを十分にとる」ということであった。教職員とのコミュニケーションや意識交流を通じて、教職員の思いや社会から期待されていることを伝えるということが重要であると言える。また、コミュニケーションを通じて「学生の反応をとらえ」、適切な対応をしていくということが重要と思われる。記述回答では学生の本分である学業に意欲的・主体的に取り組んでいることが重要という意見が多い。専門分野への興味を早い段階で引き出し、維持していくことが肝要であろう。卒論生であれば、学会への参加、研究発表、他大学の学生や社会人との交流を通じて、興味や関心をさらに引き出すというのが効果的のようである。また、学生の「活動を支援する」という意見も多い。本学にはすでに様々な活動があるが、学生がより積極的・主体的に参加できるようにしていく必要があ

と思われる。課外活動が学生の元気を高めるということに有効に作用していると考えられるが、すでに理科教室、オープンキャンパス、学生プロジェクト、生協委員など本学では多くの活動が実施されている。大学側で学生の参加をさらに誘導するような枠組みや仕組みを作り、学生に主体的・積極的に参加してもらうことが重要と思われる。また、その中で目立った努力・活動を行った学生に対する表彰・顕彰の機会を増やし学生に知らせていくことが、学生の元気をさらに高めるであろう。また、周囲の学生に対しても良い影響を及ぼすと思われる。

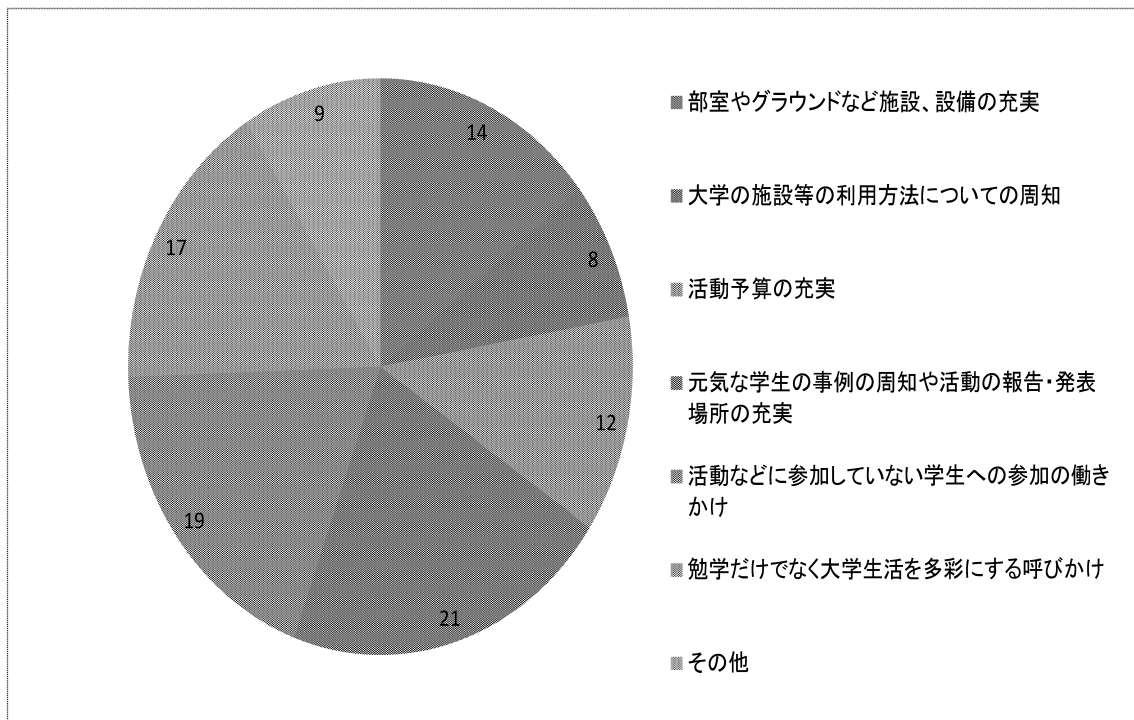


図 3. 「学生の元気という点からどのような取り組みや施策が必要だと考えられるか」に対する回答

最後に「学生の元気という点からどのような取り組みや施策が必要だと考えられるか」という教職員への質問に対する回答を図 3 に示す。学生を元気にする活動を進めるためにも、「学生とのコミュニケーションを向上するための対策が必要」という意見が最も多かった。コミュニケーションを向上させて、実態や学生の希望を把握するのが大切だと考えられる。学年をまたいだ縦のつながり、世代を超えたコミュニケーションを通じてコミュニケーションを向上させるというのが良いと思われる。新宿にも八王子と同様に部室スペースを設けていただきたいという要望もあった。また、コミュニケーションの基礎として、学内での挨拶を奨励していただきたいという意見もあり有効な策だと思われる。さらに他大学の活動事例を調査し、本学にあわせた形で取り込んでいくことが重要であると思われる。事例の調査には他大学より本学に着任された教員や、他大学と交流のある職員にヒアリングするのも有効であろう。

今後、さらに学生の元気を醸成していくためには、元気のない学生への働きかけ、そして全体

としての底上げが重要になるかと思われ、それには多方面への施策が必要であろう。元気な学生の活動をアピールする場所や媒体の充実、それとあわせて元気のない学生に参加を促すような呼びかけ・働きかけをする仕組みが重要と思われる。また、大学近隣の企業と共同研究を誘致し学生を参画させる、大学の知名度を上げる広報活動の充実、女子学生と共に活動できる場の提供など様々な意見が上がった。いずれにしても、本学のポリシーに則って施策を行っていくのが必要であると思われる。最後に、学生が元気であるためには教職員がまず元気である必要があるという意見もあった。教職員の元気・熱意を学生に示していくことが重要と思われる。